

英文法指導における認知意味的発見学習の試み

Cognitive Semantics and the Journal Approach: Grammar of the Learner's Englishes

古賀 裕子

(中央大学、慶応大学非常勤講師)

本稿ではコミュニケーション(情報のやり取り)から見た文法観を理論的枠組みに、中央大学文学部英米文学専攻の学生を対象にした必修科目「実践英文法」の実践報告を行なう。1クラス約40名、通年で週1回、90分、テキストはCambridge出版のGrammar for Use¹⁾が大学側から指定されている。このテキストは全て英語で、1ユニットが見開き2ページ(左ページが文法項目の解説、右ページが練習問題)になっている。指定テキストに対する学生の意見は「重い」「つまらない」「練習問題が単調」など否定的なものが多い。このような条件の中で、テキストに挑戦する気持ちで以下の理論的枠組みの具現化を試みた。

従来の文法指導は常にネイティブスピーカーの「正しい文」のみを生成する直感を手本にしていた。前述のテキストもその例外ではない。ところがコミュニケーションの現状をみると、我々は日常の対話のなかで完全な文だけを使って情報を伝達しているわけではない。不完全な状態の断片的な言葉は思考錯誤、相手とのやり取りの過程を経て、メッセージを伝達している。「情報伝達のための文法」は、情報の組み立て、意味の確認、修正のプロセスに忠実に、「正しい文」よりも柔軟な、幅をもった規範でなければならない。そこで、文よりも小さな情報の断片であるチャンクを対話文法の基本単位と考えた。更に、「正しい文の作り方」の暗記を止め、「どんな形にも意味がある」という大前提のもとで、規則と意味・情報機能を関連づけるアプローチを提案する。

従来のネイティブスピーカーへの一方的なAdaptation Approach²⁾のもう一つの問題点は、学習者が「こういう言い方をネイティブスピーカーはするか。」「ネイティブスピーカーと違っていたら、馬鹿にされたり通じないのではないか。」という不安を抱き続けることだ。他人の基準で評価されることを恐れ、「文法が気になって肝心の伝えたい思いが疎かになってしまう」という状況に陥る可能性がある。自分の伝えたい情報を組み立てながら話すためには、自分自身の内的基準によって最もびったりくる文法形式を自信をもって選択することが重要である。具体的には、遭遇した実際の使用例を暗記項目ではなくデータとして扱い、使用原理についての仮説、検証、修正というプロセスを積み重ねていく。このプロセスの中ではグループ活動、交換日記、クラスメートのレポートの批評などを通して、できるだけ学習者間の意見交換を多くした。また、クラス外で英語を使う相手(ネイティブスピーカーには限定しない)とのコミュニケーションを仮説の検証データにすることを促した。

指導手順は次の四段階に分かれる。(1)教師は、テキストで解説されている文法事項から逸脱している映画の台詞、歌詞、広告文、日常会話の例等を提示し、「なぜこのような規則があるのか、どうして例外なのか。」と問い掛ける。ここで「文法規則は規則だから丸暗記するしかない」という態度を方向転換させる。「形が同じなら共通のイメージ、機能がある」という前提のもと、使用原理に対する仮説を立てるようにしむける。(2)学生はクラス外で毎週、テキストの文法説明を読み、練習問題を解き、解答シートで自分で答え合わせをする。

9月22日(日) 実践報告第1室(1110)

練習問題を自力で解かなくても、テキストや解答シートを注意深く検討するだけでも、また、テキスト以外の用例を中心にしても構わない。大切なのは各自が割当の文法項目に対して、なぜそう決まっているのか素朴な疑問を持ったり、発見したりすることだからだ。その後、交換日記(Grammar Discovery Journal: GDJ)に、模範解答で納得がいけない点とその理由、文法事項の説明をよんで「なぜ」と思った点、テキストの規則の例外、反例、テキストの文法より説得力のある独自の理論などをまとめてくる。テキストではなく、このGDJがクラス内活動の中心資料となる。(3) クラスでは4、5名のグループに分かれ、各自のGDJの内容をもとに話し合う。話し合っても解決できなかった疑問点や、討論の中から発見した文法規則の使用原理を各グループの書記が整理して全体発表の準備をする。この作業は90分のうち、45分から60分を占める。(4) グループの話し合いのあと、グループ全員が討論のハイライト・トピックを、例文の板書とともに発表する。未解決の問題を抱えているグループがあれば、クラス全体で考え、発見をしたグループには反例や質問を行なって、使用原理を洗練していく。最後に教師が共通の課題、新発見をまとめる。ここで、ある文法の使用原理として、はっきりとした結論を出す必要はないという点を強調しておく。例えば夏休みなどの機会に、映画、音楽、海外旅行、文通などを通じておもしろい使用例に出会うかもしれない。その際、記録にとどめておき、現在までの自分の仮説を常に検証、修正していけばよい。このような過程を経て、特に取り組みたい課題を各自持ち続け、夏休みには自由研究に取り組んだ。学生達は自分が興味をもった文法事項について、映画、音楽の歌詞、旅行中の会話、広告、道路標識、小説、漫画、新聞記事など、文字どおり「生きた英語」の中にデータを求め、独自の使用原理を確立していった。この自由研究レポートについては、1ページのアブストラクトを作成した後、読みたいレポートを各自選び、一つのレポートにつき、最低2名の担当者を決めて交換した。担当者はクラスメートの研究に対するコメント、サポーティングデータ、反論、反例をまとめた批評を研究者本人に返す。研究者は後期の最後までに批評文を参考にしてレポートを修正して、批評文とともに再提出した。

最後に授業についての無記名アンケートでは、学生達は自分達が中心になって発見する喜びを覚え、文法規則の意味づけを通して、目標言語の持つ表現の豊かさ、繊細さを感じ取っている。学習者同志のフィードバック(GDJやレポートの交換)は、各自の内的基準の洗練を促進する上でも、仲間同志学習意欲を刺激しあう意味でも効果的だった。今後の課題として、第一に、確立した内的基準を自己表現に発展させる活動とその評価法の研究、第二に、国際補助語として英語を扱うにあたり、これまで以上に英語規範の複数化(World Englishes)を射程に捕えた教材の開発が不可欠である。

キーワード： 対話の文法／発見学習／ジャーナルアプローチ／認知意味論／英語規範の複数化